

〔書 評〕

TAYLOR, T. N. 1981. *Paleobotany, an introduction to fossil plant biology*. 589 pp. McGraw-Hill, New York.

STEWART, W. N. 1983. *Paleobotany and the evolution of plants*. 405 pp. Cambridge Univ. Press, New York.

MEYEN, S. V. 1987. *Fundamentals of paleobotany*. 432 pp. Chapman and Hall, London.

THOMAS, B. A. and SPICER, R. A. 1987. *The evolution and palaeobiology of land plants*. 309 pp. Croom Helm, London.

1980年代に入ってから、古植物学の教科書の出版が相次いだ。従来の古植物学の教科書といえば、ANDREWS, H. N. 1961. "Studies in paleobotany." John Wiley & Sons, New York ; DELEVORYAS, T. 1963. "Morphology and evolution of fossil plants." Holt, Reinhart & Winston, New York ; GOTHAN, W. and WEYLAND, H. 1973. "Lehrbuch der Paläobotanik, 3rd ed." Akademie-Verlag, Berlin などがあるが、これらはいずれもやや内容が古くなっており、新しい教科書の出版が待ち望まれていた。短期間に充実した教科書が相次いで発行され、この研究分野の最近の急速な発展を容易に知ることができるようになった。

TAYLOR (1981) はオーソドックスな教科書で、試料の保存状態や古植物学の研究法などについて述べた Introduction に続き、先カンブリア時代の生物にはじまり、被子植物にいたるまで、順に主な化石とその進化古生物学上の意義について述べられており、写真と図が多用されている。ただし、植物形態学に余り親しんでいないものにとっては、ややとりつきにくい教科書と思われる。

STEWART (1983) も同様のオーソドックスな教科書である。美しい線画が多用されており、植物体全体の復元図も多い。それぞれの章のまとめに、その分類群を含む系統樹の1案が示されている。古植物学を専門とするもの以外にとっては、こちらの教科書の方が、より具体的イメージをつかみやすいものと思われる。

MEYEN (1987) は、他の教科書とは違った内容を含んでいる。分類群ごとに紹介した通常の部分に続き、花粉学(4章)、表皮(5章)、古生態(6章)、植物相の発展(7章)、古植物学と他の研究分野の関連(8章)についてそれぞれ1章を設けて論じている。系統樹も古植物地理と組み合わせた独得のものが描かれている。図はすべて自身で描き直した線画である。

THOMAS and SPICER (1987) は陸上植物の進化を、三つの分化段階、すなわち、シダ植物段階、裸子植物段階、被子植物段階に分け、それぞれについてまとめており、簡潔な読物となっている。漸進的進化と断続平衡説の対立や、分岐分類学など、最近の古生物学や分類学の新しい流れと古植物学の関連についても簡単に触れている。

これらの教科書には、われわれが当対象としている鮮新世以降の植物化石は残念ながらほとんど触れられていない。あたかも古植物学の対象は鮮新世以降には存在しないように見える。このような現状を打破するためにもわれわれ自身が積極的に研究を進めていく必要があるだろう。

(南木睦彦)